

## 使い慣れたストーブでも過信は禁物！危険を予知した適正な使用

### はじめに



年が改まり、冬本番を迎えました。朝、目が覚めるとまず暖房器のスイッチを入れるという方も多いのではないのでしょうか。ストーブは今でも暖房機の代名詞的な存在ですが、市内ではストーブが原因の住宅火災は過去 5 年間に 59 件発生しています。これは順位で言うとワースト 5 位。しかし、ストーブは冬場にのみ使うものなので 11 月から 3 月までの冬季に限定すると 4 位に順位をあげます。今回は火災原因としては相変わらず横ばいの発生状況が続くストーブのうち石油ストーブについて、考えてみたいと思います。

### 日頃の手入れをすることで火事が防げる



せめて、年に 1 度は確認していただきたいのが、下記の 2 項目です。

- 芯は汚れていないか
- 置台にホコリが溜まっていないか



まず、なぜ芯が汚れた状態ではいけないのでしょうか。

長年使っている石油ストーブの芯には灯油やゴミの塊、タールが付着していることがあります。石油ストーブの芯に付着するタールとは灯油の変質物(粘り気あり)であり、このタルルのせいで着火の際に臭いがしたり、火の回りが遅くなったりします。

また、このタールが周囲に引っかけたり消したつもりでも芯が下がりきらず消えないという事態が起こり得ます。

さらに地震の際に揺れを感知して働く耐震自動消火装置が機能しなくなることもつながりかねません。

芯はから焼等の方法でクリーニングできる場合もありますが、多量のタールが付着している場合は芯の交換が必要です。ぜひ一度、器具購入時付属の取扱説明書で詳細をご確認ください。

次になぜほこりをためてはいけないのでしょうか。

ストーブの下にはストーブが燃焼を継続するための吸気口があります。ここがほこりなどでふさがると、酸欠状態から不完全燃焼を起こして次のように火災になることがあります。これを吹き返し現象と呼んでいます。

- 1 不完全燃焼により、完全には燃えきらない灯油の気化ガスが空気の通り道を通って下へ流れ、外気に冷やされて灯油に戻り、置台に溜まる。
- 2 詰まっていたほこりが何らかのはずみでとれたりすると、空気が一気に流れ込むため、爆発的な燃焼状態になって、空気の通り道から炎が吹き出します。これを吹き返し現象といいます。
- 3 置台にたまっていた灯油に吹き出した炎が着火し、火災になる。

石油ストーブにほこりは大敵ということを忘れないで下さい。

### 給油時には要注意

石油ストーブが原因で発生した火災のうち、ストーブの火をつけたまま給油していたカートリッジタンクの蓋がキッチリ締まっていなかったなどの理由で、こぼれた灯油がストーブの火にかかって火事になるケースが43%にのぼります。(過去5年間の神戸市火災統計より)

最近では給油時自動消火装置付きのストーブが普及していますが、それでもしば

らくは燃焼筒付近は高温ため、灯油がかかると火がつく恐れがあります。  
給油時には十分ご注意ください。

## おわりに

技術向上等により製品の安全性は格段に向上しているものの、ストーブの火災を減らすためには私たち使う側の危険を予知した適正な使用を心がけることが大切です。

## 神戸市 消防局 予防課

〒650-8570 神戸市中央区加納町 6-5-1 神戸市役所 3 号館 9 階 [市役所への道順・地図](#)